

国語辞書方法論

A Suggestion for the Compilation of a Comprehensive  
Japanese Dictionary

金子 豊  
*Yutaka Kaneko*

*Résumé*

The purpose of this article is to find the ways to make it possible to compile and publish a comprehensive dictionary. At present it is difficult to find a comprehensive Japanese language dictionary, especially that include rich vocabulary with pronunciation, etymological explanations, illustrative quotations, historical usage of words, etc.

However, as it is of importance to trace the viewpoints of lexicographers as to the desirable nature of Japanese dictionary, it is tried to systematically arrange the expressed opinions, or methodologies, on the crucial points of compiling dictionaries.

If a comprehensive dictionary is to take the historical principles like O. E. D., adequate and accurate quotations are indispensable. To grasp the present tendency, several well known dictionaries are compared with each other in this respect.

As the writer firmly believe that the basis of good language dictionaries lies in the adequate indication of the usage of words, he tried to stress the importance of quotations in the light of the existing indexes and concordances.

In conclusion, the writer emphasized the necessity of cooperational work based upon specialized research and of financial support, if possible, by government.

(Department of Mathematical Engineering and Instrumentation  
Physics Library, University of Tokyo)

序

- I. 国語辞書編纂の再検討
  - II. 国語大辞書実現の可能性
- 結

教育理論家は一日も早くジャーナリズムから退場し、研究室に閉じこもるべきであり、教師は辞書にもどるべきです。<sup>1)</sup>

## 序

国語辞書のあり方については、明治 20 年代から論じられていて、その問題点もすでに明らかにされてきている。ところが、これまで世に送られてきたさまざまな国語辞書をふりかえて、一方において求められてきた国語辞書の理想像と比べてみると、現実と理想の間に横たわるあまりにも大きな隔たりから、国語辞書そのものの向上あるいは完成には、今後よほど真剣に取り組まなければならないことを痛感させられるのである。その証左の一端として、今日になっても

“少しこみいったことを引こうとすると、どうしても「大言海」か「大日本国語辞典」に頼らなければならない”<sup>2)</sup>

“国語学者が隅から隅まで、そこに採択されている言葉に責任を持っている国語辞典、そういう字引に私は会いたいのである”<sup>3)</sup>

“われわれの国語辞典はたいへん浩漭なものでもいいから、もっとすぐれたものが作られなければいけないと思う。国語辞典などは、国家的事業の一つである”<sup>4)</sup>

というような意見が、あいかわらず発表されているのである。

こうした意味合いから考えると、国語辞書の方法論は、そのみでは実現に結びつき難く、まったく無力に等しいことがわかる。とはいえ、国語辞書について国語学者が決して無関心であったわけではない。それをあえて取り上げたのは、国語辞書方法論をめぐる、その実現をはばむ要因はいかなるものであって、どうしたならばその原因を克服して、理想的な国語大辞書を可能にすることができるかを解明してみたかったからである。結局は、少しでも国語辞書をよくしていきたいという、ささやかな念願に基いて筆をとったにほかならない。

## I. 国語辞書編纂の再検討

国語辞書への不満としては、専門的な立場から基礎作業がほとんどできていないことと、辞書の編集作業が不十分な点が指摘されている。<sup>5)</sup> いずれにしても“《辞書の方法論が、具体的な辞書編集というかたちで実践されたことは、いまだなかった》”ということになる”<sup>6)</sup> とい

うことになり、辞書の方法論と辞書の編集とを真に結びつけることが、今後の課題として残されていると言えよう。辞書方法論とは一般に辞書編集の方法を意味しているのであるから、まずはじめになすべきことは、これまでの辞書方法論をたどってみることによって、現在までに作られてきた国語辞書との間にどのようなちがいが生じているかを問うことになるであろう。このことは方法論の功罪について述べられた、

辞書の方法論のよしあしは、いつでも実践の成果を通じて批判されなければならない。だから、まず現にある辞書を具体的にとりあげることが方法論の前進のためには必要なのである。辞書を、その実践に即して批判し、かつ現実改良することが必要なのである。有効な実践はすぐれた方法論なしには不可能であるということとはあきらかである。<sup>7)</sup>

ことにも関連して、現状における国語大辞書不在の原因、つまり辞書方法論と辞書編集の実践との相互関係の欠如を明らかにすることにもなるわけである。

わが国語に関する辞書方法論を代表するものとしては、上田万年氏“日本大辞書編纂に就きて”(明治 28 年)<sup>8)</sup>、藤岡勝二氏“辞書編纂法并日本辞書の沿革”(明治 29 年)<sup>9)</sup>、新村出氏“日本辞書の現実と理想”(昭和 9 年)<sup>10)</sup> につきるようである。むろん、この他にも竹村鍛氏“辞書編纂業の進歩及び吾が国現時の辞書”(明治 31 年)<sup>11)</sup>、高楠順次郎氏“日本字書の完成”(明治 33 年)<sup>12)</sup>、雑誌記事としての“辞書の出版”(明治 29 年)<sup>13)</sup>、“日本辞書の編纂”(明治 33 年)<sup>14)</sup> から見坊豪紀氏“現代語辞書の批判と編纂の実際”(昭和 28 年)<sup>15)</sup>、山田忠雄氏“漢和辞典の成立(昭和 34 年)<sup>16)</sup>、中村広徳氏“国語大辞典編纂の方法に関する一試案”(昭和 34 年)<sup>17)</sup>、見坊豪紀氏“辞書の姿”(昭和 36 年)<sup>18)</sup>、山田俊雄氏“日本の辞書の沿革と将来”(昭和 36 年)<sup>19)</sup>、“辞書、索引作成の歴史”(昭和 36 年)<sup>20)</sup>、山田俊雄氏“現代国語辞書の閉塞について”(昭和 37 年)<sup>21)</sup>、山田忠雄氏「三代の辞書——国語辞書百年小史——」(昭和 42 年)<sup>22)</sup> などがあり、方法論とは多少趣きを異にするが、土橋八千太氏“大言海訂正補録”(昭和 35 年)<sup>23)</sup>、同氏“大言海補考余録”(昭和 38 年)<sup>24)</sup> も忘れてはならない論文である。上田論文は明治 22 年 2 月の東洋学会において講演したものであって、その頃までに出現していた主な国語辞書には、「官板語彙」(ア部よりエ部まで。アーウ 明治

4-14 年。エ 明治 17 年。以後中絶), 物集高見編「日本小辞典」(明治 11 年), 近藤真琴編「ことばのその」(明治 18 年), 高橋五郎編「いろは辞典」(明治 21 年) などがあつた。また上田論文から藤岡論文までの間では, 大槻文彦「言海」(明治 24 年公刊), 山田美妙「日本大辞書」(明治 25 年), 物集高見編「日本大辞林」(明治 27 年) などがある。この後, 新村論文までとなると, 実際には昭和 8 年夏に松本で開かれた国語講習会の席上で発表されたものなので, 落合直文編「ことばの泉」(明治 31 年), 金沢庄三郎編「辞林」(明治 40 年), 山田美妙「大辞典」(明治 45 年), 上田万年・松井簡治「大日本国語辞典」(大正 4-8 年), 金沢庄三郎編「広辞林」(大正 14 年), 落合直文・芳賀矢一「言泉」(大正 10-昭和 3 年) などがあつて, 大槻文彦「大言海」(昭和 7-12 年) は編集発行中ということになる。

さらに新村論文以降, 現在にいたる約 30 年間に出版された代表的な国語辞書としては, 平凡社編「大辞典」(昭和 9-11 年), 新村出編「辞苑」(昭和 10 年), 金田一京助編「明解国語辞典」(昭和 18 年), 新村出編「言林」(昭和 24 年), 金田一京助編「辞海」(昭和 27 年), 新村出編「広辞苑」(昭和 30 年), 時枝誠記編「例解国語辞典」(昭和 31 年), 西尾実・岩淵悦太郎編「岩波国語辞典」(昭和 38 年), 山田俊雄・築島裕編「新潮国語辞典 現代語・古語」(昭和 40 年) などがみられる。

そこで, 上田, 藤岡, 新村三論文の位置づけを試みると, 上田論文は辞書に対する認識を喚起しつつ, 国語大辞書への方向を指示したのに続いて, 藤岡論文では辞書をはじめとして言語学などの模範を広く欧米にたづね, あわせてわが国語の性格も考量した上で, 国語大辞書の未来像を具体的に追求している。新村論文は発表の年月がこの二論文からかなり隔っているせいもあってか, それまでの国語辞書を素材として, 辞書の現実と理想とのずれを明確化することから, 国語大辞書編纂をくりかえし強調しているのである。そしてこの三論文は他の諸論文と比べて, いずれも実際の辞書に即してそのあり方をシステムチックに取り上げていて, 将来の辞書はこうあるべきであるという理想的な姿をめざして展開されている点に特色がみられる。今, その内容を各論文の構成によって示すと次のようになる(各項目ごとに, その該当頁によって長さをあらわし, 便宜的に符号をつけた。なお, 以下の引用文については, できるだけ原文に忠実なように配慮したが, 活字の問題もあるため, 漢字は主として当用漢字を用い, かなづかいも若干改めたことをお

断りしておく。)

#### A. 上田万年 日本大辞書編纂に就きて

- <序論> p. 299-313 A—序
- 第一 語に就て  
p. 313-321 A—1
- 第一 発音法を示すべきこと。  
p. 313-315 A—11
- 第二 文法上の語の性質を示すべきこと。  
p. 315 A—12
- 第三 専門語を区別し, 示すべきこと。  
p. 315-316 A—13
- 第四 語の歴史を示すべきこと。  
p. 316-317 A—14
- 第五 語の釈義を示すこと。  
p. 317-318 A—15
- 第六 適例を挿入すること。  
p. 318-319 A—16
- 第七 同意語を挿入すること。  
p. 319 A—17
- 第八 画図を挿入すること。  
p. 319-320 A—18
- 第九 熟語并に注意の箇条を挿入すること。  
p. 320 A—19
- 第二 語の集合法に就て  
p. 321-326 A—2
- 第三 辞書の体裁に就きて  
p. 326-330 A—3
- <結論> p. 330-331 A—結

〔< > はことばを補ったことを示す。以下同じ。〕

#### B. 藤岡勝二 辞書編纂法并日本辞書の沿革

(雑誌掲載論文であるため通号ページをとった)

- 第一章 辞書の名称  
p. 15-21 B—1
- 第二章 辞書の定義  
p. 21-22 B—2
- 第三章 辞書の分類  
p. 22-32 B—3
- 第一 性質上分類  
p. 23-29 B—31
- 第二 組織上分類  
p. 29-32 B—32
- 第四章 辞書の組織  
p. 147-156 B—4

# 国語辞書方法論

p. 700-708	
p. 1166-1174	
第一 辞書中語の集め方を論ず。	
p. 148-156	B—41
(一) 語類に富むべき事。	
p. 148-149	B—411
(二) 語の確実なる事。	
p. 149-150	B—412
(三) 私見を以て恣に採択棄捨すべからざる事。	
p. 150-152	B—413
<普通辞書として記載すべき言語の種類を論ぜん>	
p. 152-156	B—414
第二 語の配列法	
p. 700-706	B—42
第三 語の説明法	
p. 706-718	B—43
p. 1116-1174	
第一節 音 Sound	
p. 706-710	B—431
第二節 形 Form	
p. 710-718	B—432
第三節 義 Lignification	
p. 1116-1168	B—433
第四節 解釈	
p. 1168-1174	B—434
<結論> p. 1174-1175	B—結
なお、本文には“(未完)”と表示されていて、次回への予告によれば“我国古来存在せる著しき辞書に付き論評を試み其間に存する系統沿革を究めんとす”とみえているが、論文掲載誌「帝国大学」には続きがみつからないし、藤岡氏の“著作要目”にも見られない。 <sup>25)</sup>	
C. 新村出 日本辞書の現実と理想	
前ことば p. 95	C—序
第一 辞書の種類	
p. 95-100	C—1
第二 語の選択	
p. 100-103	C—2
第三 字形及び字綴	
p. 103-107	C—3
第四 発音符	

p. 107-108	C—4
第五 語源及び語史	
p. 108-116	C—5
第六 語釈	
p. 116-117	C—6
第七 挿画	
p. 117	C—7
第八 同意語と反意語	
p. 117	C—8
第九 熟語・成句其他	
p. 118	C—9
第十 用例及び出典	
p. 118-119	C—10
<まとめ>	
p. 119-120	C—結

さて、以上のような三論文の内容を一つにして整理してみると、辞書についての定義、種類と分類、組織などを別にして ①語の集め方 ②語の選択 ③語の配列 ④字形と字綴 ⑤発音 ⑥文法 ⑦語源 ⑧語史 ⑨語釈 ⑩用例及び出典 ⑪同意語・反意語 ⑫熟語・成句など ⑬挿画 ⑭体裁 ⑮大辞書への提言 のような形にまとめられる。そこでこれらの内容を次に列記してみることとする(引用箇所は内容の紹介で加えた符号を、引用文の冒頭に用いて示した)。

## ① 語の集め方

(A—序) モーレー氏はいはく No one man's English is all English. 一人の英語は決して一般の英語にあらずと、かかれば一学者が自ら知るだけの語をあつめて、以てその国の全き辞書なりとするが如きは、尤も不適當なる者といはざるを得ず、如何となればその語中には、その学者のみに通じて、他の人に通ぜぬものもあるべければなり。

(A—2) 辞書は語をあつめ、これを解くものなれば、その文にあるとなきとを問はず、悉皆登録して然るべしと信ず……今、日本の如き文学幼稚の国にありては、語の存して文学上に出でざるもの、実に多かるべければ、かかる類は文学上に現はるるを待たんより、寧ろ辞書学者の学力を以てこれを挿入するにしかず。もしそれ一定の区域を画するに難き事ありとせば、須く仏国アカデミーの如き会議を起し、博士碩学を招集してこれを論定せしむべきなり。思ふにグリム氏等の口頭の語を挿入せるは世人の大に喜びし所ならん。

(A—2) 今日わが国は、未だ専門学の辞書に富まず、これらは早く専門家に依頼して、よき定義を附したるものを出さしむべし。

(B—411) 語類に富むべき事。完全無欠の大辞書を編纂する事は剛強なる忍耐と俊秀なる智識<sup>(ママ)</sup>と考巧<sup>(ママ)</sup>なる熟練とを以て非常の労力を費し先進著者の遺績<sup>(ママ)</sup>を補綴し更に蒐集訂正し一層の整頓を加ふるに多数の年月を経るにあらざれば能く成し得る事にあらず。然り而して此の如くにして成効<sup>(ママ)</sup>したる辞書は全般の言語を包有せざるべからず。廃滅に帰し已に不用に属し去りたる言語、新しく造り出されたる言語、野鄙なる言語、蛮語、滑稽に用ゆる語、一時特別の意味を以て流行したる言語、村落の方言、地方の俗語、種々の種族、職業勤務に従て異なる語をも悉く記載せらるべきなり。これ完全なる辞書は完全なる記録にして完全なる絵画なればなり。

(B—412) 語の確実なる事。然りと雖漫に多数の言語を蒐集する事にのみ注意し果して其語は恰も記載せんとする如き音を以て其の時或は其の所に於て行はれしか若くば行はるるか否やの觀察を怠るときはこれ一の難駁なる埃囊に過ぎず辞書として信用すべき価値なし。

(C—2) 或る分らぬ言葉が出て来た時、大辞書を見れば直ぐ分ると云ふ様であれば有難いのであって、かういふ風に役立つものを編纂するのが、理想の極地であるけれ共、人間の力や、経済的事情等には制限があるから其れも出来ない。然し現在のものは余りに不満足である。

## ② 語の選択

(B—413) 私見を以て恣に採択棄捨すべからざる事。苟も一国言語の辞書を著はさんとするものは宜しく一家の見識を立て確実なる語を取らざるべからず。然り而して其見識たるや猥りに独断的臆測を濫用するの謂にあらざるなり。何となれば辞書は言語の記載にして苟も其国言語の歴史上事実<sup>(ママ)</sup>に存せざること及び言語学上あり得べからざることを記すを許さざればなり。之を要するに辞書の著者は其国言語の歴史を知らざるべからず。言語学の智識<sup>(ママ)</sup>なからざるべからず。辞書編纂上此注意の有無は大に世人に誤謬を伝ふるの虞<sup>(ママ)</sup>あればなり。

(B—413) 辞書著者は此語は本邦固有のものにあらざれば採摘せず、此語は都会の雅言にあらざるが故に省けりと自ら語を撰択して辞書以外に放棄するの権利なし。されば其語の存在確実なる以上は必しも之を放棄せず、訛俗の嫌なく之を記載して其意を註し其上に於て自

己の学識を以て其語の精密なる価値の有無を論じ充分研鑽の結果を吐露すべきなり。即ち只其確実に存在せしものと否やとを撰べてこれを記するを要す。猥りに言語を撰択し自家の定限内に於て採摘するときは其誤謬は一般に流布せられ其辞書は他の辞書に比して秀技なるの標準となるよりは寧ろ言語の専横者<sup>タイラント</sup>なりと評せらるるに至るべければ最も注意すべき要件たり。

(B—432) 言語に就て記載するは単に時間上に於ける注意を要するのみならず。亦空間的の觀察を怠らず、広く其研究せる結果を挙ぐべし。即ち俗語方言訛言は憚りなく之を出して説明すべし……依て言語を論ずるもの敢て雅俗といふ如き名辞に拘はらず広且つ普く言語を網羅するを以て辞書の要点とすべし。語の軀形変遷を見るに於て非常の利益あればなり。

(C—2) 言葉の選択と云ふときに我々の迷ふのは、前章で述べた様に、行はれる範囲、或は流通性の問題である。も一の問題は、規範的標準的觀念の上から来る選択に就いてである。此の場合には、古いものは旧来の文献にあるからと云ふので、間違つてゐても採録せんとするに傾くのである。其の辺は仕方が無いと思ふが、然し、實際何処迄規範的態度で取捨せんとするか、何処迄流通性で採否を定めんとするかに迷ふのである。

(C—2) 又古典的なものは、例外的に表はれた本の中の一語をも加へてゐるが、さうしたものを採録するならば、地方の一語をも採録するのが公平である。然し是れも出来ない事であらうが、とにかく、従来の辞典は、余り古典尊重で、新語を落してゐ過ぎるのであって、是れは何うも賛成出来ない。

## ③ 語の配列

(A—3) 予輩は見出しの語だけを現はすに、羅馬字を以てすべしと主張するものなり。その羅馬字は、二十二三字の連合にて、千万の語を代表するに足り、且欧米辞書は同法にて引くことを得べければ、これよりの人に取りては、尤も便利なるべければなり。而して余は仮字と「ふりがな」を附したる平易の漢字とにて、釈義適例等を挙んと欲す。

(B—42) 辞書の上に語を配列するには、最も容易に最も迅速に最も明確に発見せらるる如くするを最上とす。従来の経験に依れば、西洋のアルファベット順辞書は最も捜求に便なり。其他の列ね方は時として便なることあるも一般に便なるはアルファベットに勝るものなきを信ず。これアルファベットは其数僅かに二十六字にし

て、某字の前には某字あり、某字は何処に位するかを知るに最も容易なればなり。我国の辞書と雖、亦アルファベット順に列ねて羅馬字を採用せば甚便ならんも、今日の有様にては未だ国字の改良論一定せず、従て言語表示の方法に爭議しあれば、一般の同意を得るに難かるべし。故に今は羅馬字を用ゐずして他に良方法ありやと云ふに、余は五十音図順を以て是に次ぐものとせんとす。

#### ④ 字形と字綴

(B—431) 歴史的仮字遣法に従て記せる語には発音を示すの必要あるが如く表音的の記号を使用して記せる語には古来此語を書き顯はすに如何なる文字を以てしたるかを示すを要す。單に仮字の此に当れるものを出すのみならず、漢字をも又示すべし。これは我国の辞書として殊に必要なことにして古来漢語漢字を採用したる影響を顧るときは忽にすべからざることたり。漢字を出すはひとり写音の文字を用ゐて語を標出せる場合に必要なるのみならず、歴史的仮字遣法に従て仮字を以て記せるときと雖免るべからざる条件なり。

(C—3) 日本在来の辞書でも、其処へ表出してある言葉は、歴史的の仮名遣により、其の読み方即ち発音を記してあるものがあるし、又近年は突然発音的の仮名遣を其処へ表出し、其の下に正しい仮名遣を記し、又其れに当る漢字の文字遣を表はす事に成つてゐる。此の第二の遣方の方が、中・小辞書では便利であるので、徐々に行はれて来る傾がある。又一步進み、ローマ字で発音から引き、其れに当る正式の仮名遣、漢字の当て方を知ると云ふ風に成つて来てゐる。所が欧羅巴の一番大きい辞書である新英辞典 N. E. D. は是れは欧羅巴最大の辞書で、又世界最大の辞書とも云へるが、此の N. E. D. に於ては、先づ標準的の綴字で言葉を出し、次に古来其の言葉を各種各様に綴つてあるとすると、多くの蔵書や文献により、其の綴方が五種あれば五種、十ならば十全部を挙げる。色々の書き別け方があったが、然し其れは今日是用ゐられぬと云ふ様な場合には、正しいものの下に括弧をして、正しきに由るものを書くことと云ふ様にし、又過去の綴字をも皆書き記し、丁寧懇切を極めてゐるのである。大辞典では此の様な綿密な記載が必要であつて、過去の文献を採る時は、かうした標出があると愈々便利なのである。

(C—3) 此の様な大辞書が、此の様に用意周到に出来てゐるならば、我々が若し理想的大辞書を編纂しようとする時は、標準的の仮名遣の他に、必要に応じて色々の仮名遣を出し、又名詞にしても、其れに該当する文字や

偽字を挙げるにも色々の制度はあるが、昔行はれた書き方などの今日行はれぬものも記載し、今日文献を調べる時の用に立てたいもののだと思ふ。其の漢字の当て方に於ても、正しい当て方とか、習慣的の当て方とか、色々あつても、昨日以来漢字の弊害が指摘されてゐるが、一旦古文獻に有る以上は、一旦登載するのが我々辞書編纂家の義務であると思ふ。然し一般的標準的の中・小辞書にはなまじ、此の様なものを挙げると、却つて人を誤らせるから、相當に制裁すべきである。けれ共、理想の大辞書では、過去の文字上の現象を出来る丈細かに登載して置き度いのである。

#### ⑤ 発音

(A—11) 発音法を示すべきこと。めつき(目ツキ)と(鍍金)と読みかたの別ちあらざるが如きは、尤も服せざる所なり。今日までの辞書には、言海を除きて、大抵茲に注日したるものなしといふべし。

(A—11) 又日本にも語の、上に「アクセント」あり、たとへば「アメ」(ame) 天「アメ」(ame) 飴はし(hashi) 橋ハシ」(hashi) 箸たけ (take) 丈「タケ」(take) 竹「クモ」(koto) 琴「コト」(koto) 事等の如き、皆よろしく符を以て区別すべきなり。これと共に語の発音法に古今あること、即ちこの語はなにの語の何代頃の発音法によりしものなる事を示すも、必要ならんと信ず。この発音法の変化を示すには、意義の生死を始め、不用語とか誤りたる語とか、いふ符号を用ゐても可ならん。

(B—431) 仍ち日本語も亦外国語になすが如く発音を符するの必要あり。即ち平仮名にて書かば其傍に片仮名にて発音を示すべし。これ辞書に於ては甚緊要なる条項なり。

(B—431) 言語は変遷するものなれば発音の時代に依りて様ならざるは明白なり。されば辞書中其標出せる発音は何れの時代のものにして他の時代の発音とは如何なる差異あるやを示すを要す。これを精細に示さんとするには大に言語の歴史的研究を要することなれば蓋し容易の業にあらず。さて其発音の変遷を記するには上に云へるが如く先づ音声の儘に示せる語を標出して其時代を記し又他の時代の発音を全く表音的に列記するを以て最簡明なりとす。

(B—431) 口語に於ては同音の語をいふとも其音調に依て意味を分別することを得と雖之を符号即ち文字に記すときは別に音調を示す方法なければ其意分ち難し。これ其語の何れの部分に音の抑揚あるやを知ること能は

ざればなり。尤も其語が文章中にあるときは文章上前後の関係よりして意味を明かに推知することを得と雖、其語のみを示せる場合には之に適當なる音韻の心像を容易に喚起せしむる方法を施さざるべからず。これ音の抑揚を示す方法 (accentuation) の必要なる所以なり。

(C—4) 是れは今日既に行はれてゐる大辞書・中辞書或は学問的辞書・実用的辞書の二種類により、標出の仕方が異なる。即ち大辞書・学問的辞書に於ては、右の方に発音を注記し、或は括弧して注記する。然し最大多数の辞書に於ては、アクセントの符号等は無論略す。又減多に使はない古語・死語・廃語に於ては、我々は如何に発音符を附けるかに迷ふのであるが、ともかく類推して、アクセントを大部分のものに附ける必要がある。

(C—4) 日本の音声学の研究が、微に入り、細を穿つといふ様に成つて来た場合には、かうした音符を科学的に正しく用ふれば可いであらうが、今の所は、日本人の発音意識を土台とし、我々の感じ分け、聞き分ける単位の単音を本とすると、翻訳的に此の写音法を用ゐるのは行き過ぎてゐると思ふ。イを i、キを ki と一々の方音を記載し、又方言研究に迄是れを行ふのは、行き過ぎになるのである。

## ⑥ 文法

(A—12) 文法上の語の性質を示すべきこと。

(B—432) 辞書には語の下に其形義を説く前に其語の性質を顯はすべし……所謂 Part of Speech 文法上の品位を示すべきなり。

(B—432) 標出したる語は現今此の如き形を有し文法上の品位此の如くにして一般に通用せらるれども其根源に遡るときは此の如き語源より来由せりと指示して其語の性状を明かにせざるべからず。

## ⑦ 語源

(B—432) ウェブスターの英語大辞書には各国の同意の語を列挙して語源研究の用に供す。日本語の言語学上に於ける位置未だ確定せられざる今日に於ては他国語を引來りて比較に供へんこと甚無用に似て杜撰の譏を受けることあらん。されども隨かに語間連絡の蓋然を認め得る場合には此を挙ぐるを可とす。(外国より輸入したる語の如きは其本国の正音を示すべきは勿論なり) 時として大に學術上に裨益するところあるべければなり。されども此を挙て妄りに独断するは甚悪しく最危険なることなれば語源の不明なるときは同様の形を有せるものに

して幾分か之を尋ぬる資料と為すことを得るものを列挙するに止るを以て最安全なりとす。其列挙の方法は時代の順に従はば歴史的研究を裨くるの益あり。Murray は Conjectural Etymology と云ふことを云へり。これは語源の疑はしきもの或は全く推知すべからざるものあるときは歴史的に其言語の事実を挙げ其用ゐられし所を明す方法なり。これは其語の歴史に關係することの外は全く記せざるものにして其他の事は語源を研究する専門家の事業に譲るものなり。この方法は恰も日本語辞書に採用して宜しきものなるべし。又實際語源を挙るに於て其確實なる出處を明すを要す。

(C—5) 言海の新旧本には可成語源が説いてある。又諦めて、語源を説かぬものには、大日本国語辞典がある。是れは賢明なやり方かも知れないが、併ら究竟の語源が不可能な場合が多いと云つても、もっと浅い手近かな語源説をも捨てるのは何うかと思ふ。それで私達は、将来の大辞典に於ては、究竟的語源は注記しなくても、一通りの語源説を註記する事は必要であると思ふ。

## ⑧ 語史

(A—14) 語の歴史を示すべきこと。西洋の辞書には必ずこのこと示しありて、語の系統を一日に見るの便に供す。歴史とは起源変化等のことにて、仮令ば一の語は一国特有のものか、或は外国より伝來せしものか、もし伝來せるものなれば、その本国の語はなにになになるか、等に関するものこれなり。

(A—21) 年代によりて、語をあつむるときは、その意義の変遷を見るに甚だ便益あり、而して又発音変化の大則を知る上にも、頗る都合よし。これ古來人智の発達と、開化の状態とを知るに、又一日も欠く可らざる者なり。又右の如き分類法にて研究するときは、専門語を一まとめにして得るの利益あり。

(B—432) 語の形成立してより以後の変遷を示すことは語源を挙るに次で必要なることなり。これを Subsequent form-history といふ。

(B—432) 凡て一国の言語辞書としては其国の各語が何時如何なる理由より如何なる形を以て如何なる意味を顯はして国語となりしかを示すこと、形意は如何なる歴史を有するか、それを使用し來れる間に何れの意味のものは不用に属して放棄せられ、何れのものが残存せしかを示すこと、其後如何なる経過をなして何時に新しき用方が起りしかを示すことを要す。

(C—5) 語源のみならず、語史・語歴の研究に於て

は、文献を遡って研究するのが大切であると同時に、方言の研究も亦大切なのである。更にかうして研究される、語歴の研究と云ふ事は、殊に外来語の場合に於て重要なのである。即ち支那からの外来語即ち漢語でも、或は東洋又は西洋民族からの外来語でも、語源のみでなく、語歴の研究が重要なのである。今迄の辞典は、語源の研究のみで、其の語の其処へ出て来た経路は閑却してゐるのであるが、是れは片手落である。我々の知らうとするのは経路である。而て経路は文献研究によって知らねばならない。

(C—5) 一語が行はれる様に成るにも、夫々色々の経路がある。何処の語と究める丈では初歩であつて、何処が初めて、如何にして伝つたかを究めるのが、歴史的な取扱い方であつて、歴史的を主義とする大辞書の為すべき事である。

#### ⑨ 語釈

(A—13) 専門語を区別し、示すべきこと。

(A—15) 語の釈義を示すこと。今日までの辞書は、とかく同意の語にて解きしもの多く、中には漢語をあてたるものあり。たまたま釈義を与へたるものあれば、かへりてむづかしき語にて解きたるなどありて、一語を引きて数語を見ざるべからざる如きあり、不便も甚しく、愚も亦極まれりと云べし……又學術上の語の定義を与ふこと、最も必要なり。こはその専門學者によるべきなり……又釈義をあぐるには、なるべきだけ簡単にせざるべからず、蓋し辞書は百科全書にあらざればなり。

(B—433) 言語の意義を論ずる一科の学を Sema-tology といふ。言語の意義に至りては心理学の智識を以て之を論ずるの必要あることあるを以てここに一科の学となりたるなり。辞書の上に陳列せる言語の意義を示すには左程深奥なる意義にまで立入りて説くの要なしと雖意義変化の歴史を挙ぐるは完全なる辞書にかくべからざるものなり。

(B—434) ジョンソン氏云へるが如く語の意味互に相近く相類して而も其實異なるものの解釈に甚困難を与ふものあり。此の場合には分解的命題を以て明確に其意義を示すの外なし。

(B—434) 説明は可成簡にして分別し易きを主とするものなれば一國の言語辞書としては之を解釈するに普通の語を以てすべきこと勿論なり。我國の辞書には漢學崇拜の結果として或は漢文を以て解釈するもの少からず。固より例証の本源支那に存するものは例証として之

を携へ来るに於て不可なしと雖其解説をなすに漢文を用ゆるは今日に於て更に取り難し。宜しく日本語を標出して日本語にて解釈すべし。是日本辞書なるものの特色なるべければなり。

(C—6) 実用辞書の目的から見ても、標準的の見方からしても、語の源が何うであり、又経路が何うであつたにしても、第一大切なのは語釈、即ち語の説明である。或る場合には、其れが其の物の定義にもなる。殊に科学等の場合に於ては。其の説明を加へる時には、歴史的に辿って行き、其の一番古い意味から、段々、新しいものに迄記載するやり方と、今日標準にしなければならない今日通用の意義を先に出し、それから古に遡るやり方と、両様あるわけである。純然たる歴史的見地からすれば、前者の方が当然で、標準を主とする点から云へば前者は第二の事と成る。

#### ⑩ 用例及び出典

(A—16) 適例を挿入すること。難語あらば、その語を用ゐたる記者の名、并に書目巻丁号を示すべし。又一記者が格段に用ひたるものも、しか示すべきなり。もしこの引例なきときは、辞書編纂家の独断とより外ならざること多ければなり。

(A—21) 文に属するものの上に於ては、大項目によりて書籍を分類し——この分類法は一の學問にして、既に一の大事業となり居り、各図書館員の頗配慮する所なり、この事に関しては、文學士田中稻城氏が、官命を奉じて目今欧米巡回中のことなれば、さだめし帰朝後には充分の計画あらんと信ず、——その分類したる書籍を、著作の年代にて類別し、これよりこの語は何年頃にかかる体形にて、かかる書籍に見えたりと考証して示すべきなり。これ実に辞書編纂家の文學上に対する大義務にして、この引用書目をあぐることは、その語の価値を鞏固ならしむるものなり。故にその編纂家は必らず引用書を実際に見ざるべからず、決して他人の辞書にあるものとか、或は記憶したりなどとかにて、語を挿入することあるべからず。

(B—434) 辞書に例証を挙ることは甚必要なることなれどもこれを挙げざるもの甚多く遇々之を挙ぐるも充分の用をなさざるもの多し。例証は其語自ら能く其意味と歴史を示すの効あるものにして例証なきときは標出せる語の充分なる意味知られず其語の本源、本源より来りたる有様、時代によりて其語の有無変化を実際的に詳知し難し。例証なき解釈は全く著者の私見を以て独断せる



ものと認めらるるも敢て辞なかるべし……例証は其意味に従て之を挙るか或は仏国の博言学会のいふ如く所謂編年的一系を立てて数百年間大著述中に用ゐられたる有様を示すべきなり……例証を挙るには因<sup>レ</sup>拠を明細に示すを要す……各例証は簡なるを尊ぶと雖充分なる意味を示すに足るものならざるべからず。単に或文章の不足なる一断片を挙ぐべからず。或るべくは有名にして興味あり而も利益あるものを撰ぶべし。但しこれが為めに枝葉に亘り長々しく記載するは否なり。語源論定義及説明及同意義反意義を示す為に用ゐる引証及び外国語にしてまだ其国語と同化せざるものとして用ゐらるるものの引証は特に之を求めて記するを要す。

(C—10) 茲に於ても、従来の国語の辞書は、紙面の節約、紙数の節約等の必要もあるであらうし、又価格の考慮もあるであらうが、用例、出典の挙げ方が、極めて粗雑であつて、只、こんな事を古くから云つてあると一寸示す丈の事である。それで、巻の章節等をも其処へ挙げておいて、前後の文章や、全体の語気等を示す様な事をもしないのである。それは一々長い用例は引用してなくてもまあ可いが、原本に参照して見たい時に、其れが出来程に詳しい事が書いてないのである……とにかく、今迄の日本の編纂者は、ずっとテキストを見、其れから言葉を拾ひ出すよりは、前に出た辞書から用例出典を引き出す事が多い故、かうした困る場合が多いのである。それで是れからの大辞書は N. E. D. が二千の人を使った様に、大規模に、古文献、徳川時代、現代のものといふ風に新古各時代の文献に亘り、上古は上古の、中世は中世の専門家が夫々扱ひ、又其の下には専門家を助けて働く者をも置き、更に文献以外の方言は、其の方を又専門にやる人が扱ふといふ様な風に、分担努力せねばならぬのである。如何に精力絶倫の大学者がやるにしても、多くの補助者が無ければ手が着けられぬのである。殊に、用例・出典・年代の指示は、少数者の能くする所ではない。此の様に見て来ると従来のものは欠点が多い。其の理由も我々には領ける。是れに反し、西洋の多くの人と、多くの費用を使ってやったものには、敬服すべきものがある。

#### ⑩ 同意語・反意語

(A—17) 同意語を挿入すること……凡て語を記憶する上、語を解釈する上には、この同意語は最も必要のものなり。

(B—434) 異音同義 <sup>(ママ)</sup> Synonymus 及び同音異義 Ho-

<sup>(ママ)</sup> monymus を挙げ時としては標出の語の反対の意味の語をも挙げて其間の異同点を知らしむべし。又成し得べくば異音同義同音異義の理由をも記すべし。特別なる組立、比喩的用法、熟語、諺句に用ゆる異様の場合及其理由をも加ふることを得ば頗る完全なり。

(C—8) 言葉の説明に参考になる為に、其の言葉と同意義で、多少句、影、気持の違ふ同意語 (synonym) 乃至類似の語、又時として反意語 (antonym) を挙げ、本意語と対して其の意義を鮮かに浮き出させる事もある。

#### ⑪ 熟語・成句など

(A—19) 熟語并に注意の箇条を挿入すること。

(C—9) 色々の熟語・成句等を挙げてある事もあり、或は諺語や俚言等を挙げてある……是れは編者によっては、不必要として捨てる事が多いが、又編者によっては、親切に挙げてゐるのである。

#### ⑫ 挿画

(A—18) 画図を挿入すること……予輩はその挿入を可とするものなり、如何となれば画図は屢々云はざることをいひ、間接にいふべきものを直接に示すの利あるものなればなり。

(B—434) 辞書中に絵画を挿んで言語を以て説明し難き所をも能く会得せしむるの便をとるべし。絵画は一目にして其物の各部分を説明することを得長文を載せて妄りに紙数を増すの害を避けしむ。

(C—7) 語釈を助ける為に、挿画を附する事は、大辞書にあっては行はれてゐる。

#### ⑬ 体裁〔注記を施して引用に代えた〕

語を縦行に順列すべきか、横行にすべきかは、東西古今の辞書を比較して定めるべきである、活字は辞書の運命をになうといつてもいいであらう、語の順列の行数を二行とするか三行とするかは、その活字の問題といつしよに大いに論ずべきことである、挿画の有無については活版印刷の上から、入れないとかえって迷いと不体裁をきたさないともかぎらない (A—3) などとみられるのみで、その取り上げられ方は十分とはいへない。とはいふものの時代の相違から察するに、当時においてはおそらくそれなりの意義があつたものと思われる。

① から ⑭ までの限られた項目と内容からではあるが、一応個々の意見が確認された。なお、断つておかな

ければならないことは、引用文によっては厳密にはその項目の意見としてあてはまらなかったものもいくつかあったということと、一方では細かな点、たとえば ② 語の選択における人名、地名、学術用語、不用語、冠辞(以上藤岡氏)、古語、廃語、モダン語、漢語、地方語(以上新村氏)についての記述などは、無視せざるをえなかったということである。新村論文の意図は明白であるから除外するとして、上田、藤岡両論文はともに辞書の定義〔上田氏“(A—序) 一国の語を蒐集し、語の体形及び意義を明記し、且つ尤も見安く順列したる書籍なり”藤岡氏“(B—2) 一般に辞書とは一国の言語方言或はある一定の題目の下に属すべき語類を蒐集し、これを或る順序に従て配列し同国語或は異国語を以て之が解釈を施したる書をいふ”〕から、辞書を編纂するにあたって考えるべき要点〔上田氏(A—序) 第一 語の体形意義を明示すること。第二 各種の語を蒐集すること、(政治法律農工商文学技術日用器具等) 第三 辞書体裁を定むること〕や、辞書の具備すべき要素〔藤岡氏(B—4) 第一 其辞書が目的とせる題目の下に属すべき語類を悉く記載せるか、若くは最多数の語類を包有すべき事。第二 一定の順序に従て語を秩列し、搜索に最も便ならしむべき事。第三 解釈の完全なる事〕に触れているのである。これに似た態度は大槻文彦氏にもみられ、普通辞書の具備すべき条件として、1. 発音 2. 語別 3. 語原 Pronunciation Parts of speech Derivation Definition Reference 4. 語釈 5. 出典 を掲げている。<sup>26)</sup> ⑮ 大辞書への提言は、当然こうした辞書に対する基本的な認識と無関係であるとは思われない。

#### ⑮ 大辞書への提言

(A—序) 英のジョンソン、ウエルスター、モルレー等の諸氏、米のウェブスター氏、独のホッフマン、カンペ、グリム等の諸氏、仏のリトレイ氏等が多年困苦して大辞書を編纂せしには、如何なる方法をとしか、又如何なるものが一般公衆の賞讃を受け、如何なるものが非難を取りしか等を観察するは、これより一辞書を作らんとする人にとりては、実に必要の事なりとす。

(A—結) 終りに臨み、茲に一方には今日の辞書編纂家に望み、一方には江湖諸君に向って望まんと欲することあり、編纂家諸君に向って他なし、辞書編纂の業は大なる労働と堪忍と智識と精巧とを要するものたることと、ベシエレー氏が所謂その業は、言語を改革するにあらずして、言語の上の変律、正不正、美醜等を洩さず統べ現らはすにあることと、これなり。江湖諸君に向って

は、辞書編纂の業は甚だ困難なることを参酌せられ、わが明治の言語学者をして、Whether it be decreed by the authority of reason or the tyranny of ignorance, that of all the candidates for literary praise, the unhappy lexicographer hold the lowest place, neither vanity nor interest incited me to inquire. とかく三嘆せしめざることこれなり。

(B—結) されども此等の各項に妥当せる完全なる大辞書の編纂は一人の力にして全く之を成すことを得ず。近代欧米の大辞書編纂に於けるが如く此に従事する一集会を設けて該会内の諸士相互に之を図り在来の種々の辞書を参照して特殊の所長を採り足らざるを補ひ多きを除き以て大成を期すべきなり。又精密なる解釈に至りては各専門家の手を藉り定義の如きも自ら独断することなかるべし。これ大に辞書の信用に關することなり。又完全に組成せる大辞書は非常なる大冊をなすものなれば最も好く撰択せる明了簡易なる略符等を用ゐて其煩雜を避け印刷術の良巧なる方法に依りて正確に配列し而も紙数を減少するの利益を計るべし。これ辞書の舛載上大に討究を要する所以なり。されども舛載の事に至りては今ここに之を述べず。只著作者に必要な注意をなすのみ。

(C—結) 辞書は一部の人の役に立つ丈のものではなく、最多数の色々の目的を持つ人に役立つものであって、痒い所に手が届く様に有りたいのである。非常に深い専門家は別として、他の専門のものも一通り調べようとする時、大辞書から一通りは分らない事の無い様にしたいのである。そして万人向の大辞典は、一方では説明し、一方では標準を示すといふ二様の目的を持つのである。是れから国語に志す人は文献のみに拠る事をせず、又文献にしても、万葉には万葉、中世には中世と、各時代の作物を研究するのに良い写本や古筆類が発見されてゐるから、上古中古の事は段々綿密に分つて来てゐるし、又近世も現代も同様であるから、かういふ時勢に劣らぬ様、十分の力を辞書に發揮し、又法律上の事や、動物学・植物学等の事は、夫々其の道の人で国語の力ある人の力を借りて明らかにし、外来語にしても、其の国の語学が出来るばかりでなく、言語の方法性質を知つてゐて、国語の上に立つて考察する事の出来る人達の手を借り、かういふ様にして、凡ゆる点から手が揃ふ様になり、始めて日本の今後の大辞書が完備する様に成るであらう。英国の大を以てしても、四十年にして十冊の完成なのだから、私の理想では、今後五十年も経ってから、日本の理想的のものが出来るのではなからうか。其の時になれば、方

言も外来語もよくわかり、そして今述べて来た事も能く達せられる様になるであらう。

これをもって方法論における主要な三論文の見解を見終った。三者の意見が見られた項目は、① ⑤ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑬ ⑮ であって次に各々の項目でいわれている原則を示してみる。

- ① 語の集め方……網羅的であるべきこと。そして積極的に収集につとめる。
- ⑤ 発音……歴史的仮名遣の発音とアクセントを明示する。
- ⑧ 語史……語そのものの生起、発展などの変遷を示すこと。
- ⑨ 語釈……語の説明をわかりやすくして、適切なる意義を与える。
- ⑩ 用例及び出典……原典にあたって用例を集め、出典とともに提示する。必ず実行すべきこと。
- ⑪ 同意語・反意語……類縁の語や意味正反対の語を知る上で欠かせない。
- ⑬ 挿画……語釈を助ける意味で入れた方がよい。
- ⑮ 大辞書への提言……大辞書の編纂にはいずれにしろ一大決心を要する。そうでない限りはむづかしい。

これらのうちで、三者に共通してほぼ意見の一致がみられるという項目は、① ⑤ ⑧ ⑩ などで、殊に⑩については他の項目に比べて一段と力説されていることがうかがわれる。そこで、最終的に大辞書への前進は、方針が決定して実施段階に移れば、あとは語を集めることと用例を集めることから始まることになる。中でも用例を集めることが辞書の価値を決めうることになる。つまり語を集めることも選択することも用例があってこそはかどるはずであるし、全体をまとめる体裁などは辞書のもつ規模、その時の印刷術の実態などに即して決めればよいからである。そして用例が果す最も大きな要素は、これによってはじめて語史と語釈がなりたち、各々のもつ意義が一層高められるということである。目標とするとところが科学的とか学問的ということになれば、語史のない辞書、用例のない語釈はなおのこと信頼度の低下をきたすことになる。ここにまったく似たような辞書がある。どういうわけか片方には用例をともなつて語史と語釈がなされている。もう一つの方はあまり用例がみられない、語史もないという時、人はどちらの辞書を手にとって物を調べようとするかは改めていうまでもないこ

とである。辞書方法論をたどるうちに辞書における用例の重要性に逢着した。では実際に辞書の上でいかに扱われ用いられているのであろうか。その一例として“あい(愛)”および“あいする(愛する)”の二語について以下にまとめてみた。この二語を選んだ理由は、国語辞書では配列が五十音順によるものが大部分なので、最初の方の頁に載っているためと、どちらも引用する分量が適当であると判断したためで、それ以外のなにもないことを付け加えておく。

#### 1. 和訓栞 (合本3版) 谷川士清著

岐阜 三浦源助等 明治36年

〔あい、あいす、ともになし〕

#### 2. 俚言集覧 村田了阿編 井上頼園・近藤瓶城増

補 東京 皇典講究所印刷部 明治23年

あい 愛〔法華經科註〕愛ハ是愛色男女等及ヒ財物〔大藏法数〕從十四五才至十九才時ニ貪ル於種々ノ勝妙ノ資具及ヒ嬌欲等ノ境然ヲ猶未能ク廣ク偏ク追求是ヲ名テ為ス愛(十二因縁之一)

〔あいす、なし〕

#### 3. 雅言集覧 (再版) 石川雅望集 中島広足補

東京 広益図書株式会社 明治37年

あい 愛〔為兼集〕まかりつるひとの愛まし花ぞとはみなくれなるにさくそのの桃〔方大記〕かならずしも情あると直なるを愛せず

あいし 愛し〔狹、三ノ上、三十八〕母代詞いでいでけふあす御門のきみのうつくしみ愛し給ふべきあが仏をいかなる盗人のいかにしつるぞやといひて〔宇治拾、七ノ五〕よき馬に乗たる人此馬を愛しつ道も行やらざるまはするほどに

#### 4. (官板) 語彙 (文部省) 編輯寮編 明治4年

〔あい、なし〕

あいする あい 音 セ シ ス スル スレ かはゆく  
おも う 又 ダイジニスル 又をもしろくおもふなどをいふ

#### 5. 言海 (585版) 大槻文彦著 東京 林平書店

昭和13年

あい (名) 愛 愛ヅルコト。イツクシムコト。カハユサ。「子ノ一ニ溺ル」

あい・す スル・スレ・セ・シ・セヨ (他動) (不規・ニ) 愛  
(一) 愛<sup>ス</sup>ヅ。イツクシム。イトホシム。カハユク思フ。  
「子ヲー」(二) 大切ニナス。ダイジニ思フ。「君ヲー」  
「国ヲー」(三) 面白シト思フ。好ミ楽シム。「山水ヲ  
ー」

6. 大日本国語辞典 (新装版) 上田万年・松井簡治  
共著 東京 富山房 昭和 27 年

あい {愛 (名) ー かはゆがること。いつくしむこと。  
めづること。惜しむこと。あはれむこと。書経胤征  
「威克厥愛充濟, 愛克厥威允罔功」班彪文王命論「高  
四皓之名, 割肌膚之愛」二 [英 Love の訳語] 或る人  
に対して, 特別にめでいつくしむ心状 (男女間の愛など)。  
恋愛。三 宗教上の語。神が, 我れ等人類を保護  
しいつくしむ性質。

あいす 愛 (他動変) ー めづ。いつくしむ。かはゆく  
思ふ。宇治拾遺九「よき馬に乗りたる人, 此の馬を愛  
しつつ, 道も行きやらず」二 互ひに慕ひ思ふ (男女な  
ど)。三 大切に思ふ。重んず。惜しむ。「国を愛す」  
狭衣三上「いでいで, けふあす, 御門の君のうつくし  
み愛し給ふべきあが仏を」四 面白しと思ふ。好む。  
「風景を愛す」

あいらす かはゆがりて, あまえさすやうにしむく。  
賀古教信七墓廻三「ひもじうないか, 飯いやかと, 愛  
したらして, 表まで送り出でつつ」

(諺) 愛して見れば鼻欠けもえくぼ 愛すれば醜きも  
美しく見ゆ。

7. 言泉 落合直文著 芳賀矢一改修 東京 大  
倉書店 大正 10 年

あい 愛 [名] ー なさけをかくること。いつくしみ。  
情愛。慈愛。二 [英 Love] 男女のなさけ。夫婦のな  
さけ。こひ。らぶ。恋愛。三 [基] [英 Love] 神が人  
類に幸福を与ふること, 又人が神を父とし, 他の人類  
を兄弟と思ひて敬愛すること。信仰・望と共に基督教  
三徳の一。

愛に愛持つ [句] 愛嬌ある上にも愛嬌を添ふ。手習  
鑑「こちへおはいり遊ばせと言ふもしとやか, は  
いはいと, 愛に愛もつ女子 (ヲナゴ) だし」

愛, 屋烏に及ぶ [句] 『尚書大伝に「愛其人者, 愛其屋上  
之烏」とあるに本づく』その人を愛するあまりに,  
その屋根の上に居る烏までも愛す。[諺語]

五種の愛 [句] [仏] 愛執を五つに分類したるもの,

即ち楽を受けんと求むる愛, すでに得たる楽と離  
るることを欲せざる愛, 苦を生ぜしめじと欲する  
愛, すでに得たる苦を離れんと欲する愛, 及びす  
でに生じたる者を失はず, 未だ生ぜざる者を生ぜ  
しめんとする愛。

三つの愛 [句] さんあい (三愛) に同じ。栄花「いみ  
じき智者も, 死ぬるをりは, 三つの愛をこそ起す  
ものなれ」

あいす 愛す [動佐変他] ー いとほしく思ふ。いつく  
しむ。かはゆがる。めづ。このむ。二 大切に思ふ。  
大事にす。太抵「てのひらに愛して見する葡萄かな」  
愛しては其の醜 (シッ) を忘る [句] 『呂氏春秋に見  
ゆ』愛におぼれて, その人の欠点に気が附かず。  
[諺語]

8. 広辞林 (新訂 1345 版) 金沢庄三郎編 東京  
三省堂 昭和 23 年

あい [愛] (名) ー めづること。かはゆがること。い  
つくしみ。あはれみ。二 をしむこと。をしみ。三 こ  
のむこと。すき。四 慕ふこと。こひ。五 [宗] 「キリ  
スト」教にて, 神格の本質とせる純粹普遍の慈愛。博  
愛。六 [仏] 十二因縁の一, 五欲を貪ること。一屋上  
の烏に及ぶ (句) (説苑に出づ) 人を愛するの情の, 其  
人の周囲の物にも及ぶにいふ。一を割く (句) をしく  
思ふ心を抑へておもひきる。

あい・す 愛<sup>ス</sup> (他・サ変) ー いとほしく思  
ふ。かはゆく思ふ。二 おもんず。大切にす。三 たの  
しく思ふ。このむ。四 すて難く思ふ。をしむ。五 こ  
ひしく思ふ。したふ。一れば其醜を忘る (句) (呂氏  
春秋に出づ) 人を愛するの情は, 其みにくきに少しも  
気づかざるをいふ。

9. 大言海 (97 版) 大槻文彦編 東京 富山房  
昭和 19 年

あい (名) 愛 (一) イツクシムコト。アハレ  
ムコト。正韻「愛,  
仁之発也, 憐也, 恵也」論語, 学而篇「汎愛衆而親仁」  
(二) 愛<sup>ス</sup>デ親シムコト。カハユガルコト。正韻「愛, 親  
也, 寵也」「親子ノ愛, 男女ノ愛」子ノ愛ニ溺ル (三)  
惜シムコト。愛を割くト云フハ, 惜シキモノヲ棄ツル  
意ナリ (割愛ノ条ヲ見ヨ) 正韻「愛, 吝惜也」

あい・す 愛<sup>ス</sup> (他動, 左変) 愛 (一) イツクシム。愛  
ヅ。イトホシム。カハユガル。堤中納言物語, 虫めづ  
る姫君「コノ虫ドモヲ, アンタ, ユフベニあいシタマ

フ「子ヲ愛す」駿馬を愛す」(一) 大切ニナス。ダイジニ思フ。「国ヲ愛す」家ヲ愛す」(二) 好み楽しむ。面白シト思フ。「山水ヲ愛す」「骨董ヲ愛す」

10. 大辞典(縮刷第1刷) 平凡社編 東京 平凡社 昭和28年

**アイ** 愛〔解字〕形声。爰は行く義を示し、忝は恚にて音符。アイ 鳥代切アイ (一) ゆるく歩み行くさま(説文) (二) いつくしむ。揚子法言・君子「自愛、仁之至也」(三) いつくしみうやまふ。孝経「愛敬尽於事親而德教加於百姓」孝経「愛親者不敢惡於人」(四) あはれむ。親しむ。論語・学而「汎愛衆而親仁」(五) 賞づ。好む。宋史・岳飛伝「文臣不愛銭、武臣不惜死」(六) 通ずる意。戦国策「有与君之夫人相愛者」〔名乗〕ヨシ、ヤス、ナル、チカ。

**アイス** 愛す 動サ変 一 いつくしむ。いとほしむ。かはゆがる。めづ。堤中納言平虫めづる姫君「この虫どもを、あしたゆふべにあいしたまふ」二 大切にすること。だいに思ふ。挾衣・三・上「みかどの君の、うつくしみあいしたまふべきあが仏を」三 好み楽しむ。面白いと思う。賞愛。愛玩。「風景を愛す」「書画を愛す」

11. 明解国語辞典(改訂13版) 金田一京助編 東京 三省堂 昭和29年

**あい**① 〔愛〕(名) 一 いつくしみ。かわいがること。二 こい(恋)。三 〔地〕←アイルランド。

**あい・す**① 〔愛す〕一(他四) あいする。二(他サ) 〔文〕→あいする

**あい・する**③ 〔愛する〕(他サ) 一 かわいがること。二 このむ。三 したう。四 たいせつにする。〔文〕 あいす ①(サ)

12. 広辞苑 新村出編 東京 岩波書店 昭和30年

**あい** 〔愛〕① なさけをかけること。かわいがること。② 男女が思いあうこと。恋愛。ラブ。③ 何ものかにひきつけられる感じ。また或物事に没頭する快感。④ 愛玩すること。醒睡笑八「慈照院殿、一に思召さるる壺あり」⑤ 愛撫。狂、鬼継子(註)「先づーをさせられい」⑥ 〔宗〕キリスト教で、神が人類に幸福を与えること。他の人類を兄弟と思つてかわいがること。⑦ 〔仏〕十二因縁の一。五官上の欲を貪愛(註)すること。

⑧ 愛蘭(註)の略。

**一に愛持つ** 愛嬌たつぷりな様子をいう。菅原伝授手習鑑「あいあいと一女同士」

**あい・す**{あいにまゐる} 〔愛す〕((他サ変)) ① かわいがること。② すく。このむ。面白いと思う。③ 慕い思う。④ 大切にすること。→愛。〔口語〕愛する。

13. 例解国語辞典(第24版) 時枝誠記編 東京 中教出版 昭和42年

**あい** 〔愛〕(体) ① かわいがってそれに心を打ち込むこと。愛情。「親の子に対する」一 ② 異性を慕うこと。またその心持。恋。恋愛。「妻が夫に寄せる」一 ③ 物事を好むこと。愛好。「芸術に対する」一を示す ④ 神の、または私情を離れた、深いなすけ。慈悲。「キリストの一」「人類一」

**あいす** 〔愛す〕(動四)→あいする 〔愛する〕

**あいする** 〔愛する〕(動サ変) 〔四段活用にも使うが、その場合連体形、命令形はあまり使わない〕① かわいがること。「子供を」一 ② 異性を慕う、かわいがること、恋しく思う。恋する。「一人」③ 物事を好む。愛好する。「音楽を一人」④ 心から大事にする。「国を」一

14. 岩波国語辞典(第14刷) 西尾実、岩淵悦太郎編 東京 岩波書店 1967年

**あい** 〔愛〕そのものの価値を認め、強く引きつけられる気持。① かわいがり、いつくしむ心。「子にそそぐ」一。いつくしみ恵むこと。「神の一」。いたわりの心。「人類一」② 大事なものとして慕う心。「母への一」。特に、男女間の慕い寄る心。恋。③ その価値を認め、大事に思う心。「真理への一」

**あい** ((\*愛))あいにまゐる ① かわいがること。いとしく思う。「愛憎・愛育・愛妻・愛児・愛着・愛情・恩愛・慈愛・偏愛・博愛・寵愛(註)・親愛・母性愛」② 男女が思いあう。親しみの心でよりかかる。「愛執(註)・愛欲・相愛・恋愛」③ 好感をもつ。面白いと思う。「愛好・愛玩(註)・愛読」④ 大切にすること。「愛郷・愛護・愛国・自愛・友愛・祖国愛」⑤ 惜しむ。「愛惜」⑥ 「愛蘭(註)」の略。

**あいす** 〔愛す〕((四他))→あいする

**あいする** 〔愛する〕((サ変他)) それに対し愛をそそぐ。

① かわいがりいつくしむ。「子を」一。大切にすること。「国を」一 ② 異性を恋慕う。③ 物事を強く好む。「酒を」一 〔文〕愛す ((サ変))

15. 新潮国語辞典—現代語・古語—山田俊雄・築島裕編 東京 新潮社 昭和 40 年

アイ [愛] 一 かわいがること。いつくしむ心。「慈」  
「一育」二 ① [仏] 十二因縁の一。五官上の欲望をむさぼる煩惱(ぶなう)。[愛染] ② 性欲。三 愛玩(あいがん)すること。[醒睡笑八] 四 愛撫(あいぶ)。[狂・鬼の継子] 五 男女が相手を思うこと。恋愛。ラブ。リーベ。六 キリスト教で、神が人類をいつくしむこと。

アイ・する [愛する] (動) ロサ変 (文サ変一す) (口語ではサ行四段にも活用) 一 かわいがる。いつくしむ。「よしよし、暫し—せよ [平家九・二度之懸] 二 たいせつにする。「うつくしみ—し給ふべきあが仏 [狭衣三上]」[名義抄] 三 このむ。おもしろく思う。賞美する。「蓮を植ゑて—す [徒然二—四]」四 慕い思う。恋しいと思う。

これまではもっぱら辞書における用例の出し方を確かめることを試みてきた。明治以後の国語辞書の主なものにおいて、“愛”および“愛する”の二語に関して、国語の中からとられている用例を整理してみると：

#### あい (愛)

イ 栄花物語「いみじき智者も、死ぬるをりは、三つの愛をこそ起すものなれ」……言泉

ロ 醒睡笑八「慈照院殿、愛に思召さるる壺あり」……広辞苑、新潮国語辞典(出典のみ)

ハ 狂言・鬼継子「先づ愛をさせられい」……広辞苑、新潮国語辞典(出典のみ)

ニ 菅原伝授手習鑑「こちへおはいり遊ばせと言ふも  
(あいあい) (女同志)  
しとやか、はいはいと、愛に愛もつ女子どし」……言泉、広辞苑(下線部分)

#### あいする (愛する)

イ 堤中納言物語、虫めづる姫君「この虫どもを、あしたゆふべにあいしたまふ」……大言海、大辞典

ロ 狭衣物語三上「いでいで、けふあす、御門の君のうつくしみ愛し給ふべきあが仏を」……大日本国語辞典、大辞典(下線部分)、新潮国語辞典、(傍点部分)

ハ 観智院本類聚名義抄……新潮国語辞典(出典のみ)

ニ 宇治拾遺物語九「よき馬に乗りたる人、此の馬を愛しつつ、道も行きやらず」……大日本国語辞典

ホ 平家物語九、二度之懸「よしよし、暫し愛せよ」……新潮国語辞典

ヘ 徒然草二一四「蓮を植ゑて愛す」……新潮国語辞典

ト 賀古教信七墓廻三「ひもじうないか、飯いやかと、愛したらして、表まで送り出でつつ」……大日本国語辞典

チ 太祇「てのひらに愛して見する 葡萄かな」……言泉

となって 12 例みられるが、辞書に引用されている国語の用例数から順位をとると、次のようになる。

順 位	用 例 数	辞 書 名
1	3	大日本国語辞典・言泉・広辞苑・新潮国語辞典
2	2	大辞典
3	1	大言海
4	0	言海・広辞林・明解国語辞典・例解国語辞典・岩波国語辞典

ただこの場合、「新潮国語辞典」で出典名だけ掲げて用例を出していない 3 例はのぞいてある。なお、漢文の用例もふくまれていない。漢文の用例数は「大辞典」(6 例)、「大言海」(4 例)、「大日本国語辞典」(2 例)、「言泉」(1 例)であって、ここでもやはり出典名だけを掲げて用例を出してないのが、「広辞林」(2 例)と「言泉」(1 例)であるが、どちらもふくまないでおいた。そこで、改めて問題になるのは、第 1 にどうして用例なしのまま出典だけ示してすますのかということである。このことについて「新潮国語辞典」では、凡例のうちの“用例”の項において、

(㊦) 普通名詞は、原則として出典名だけにとどめた。

(㊧) 辞書・類書を出典とするものは、その出典名だけを示すにとどめた。

と断っていて、<sup>27)</sup> 前記の用例を欠いた 3 例はいずれもこの 2 ヶ条に該当しているためであることがわかる。だが凡例ではそのようなになっているものの、どうしてそうせざるをえなかったかをたづねていくと、同じく (㊦) には“用例の数は、紙面の都合から原則として一例にとどめた……”<sup>28)</sup> という記述がみられ、さらに“あとがき”にいたって、

ページ数の関係でどうしても大幅に圧縮しなければならぬことになり、涙をふるって、きわめて多量の項目・解説・用例を割愛した。このことは編者の情としては誠に忍び難いものであった。<sup>29)</sup>

また、“最初原稿では、この出来上りの分量よりも、はるかに多量の項目があったし、解説・用例も行き届いたものとしたつもりであった。校正の途中で削除した項目は恐らく五万を越えるであろう”<sup>30)</sup>ともいわれている。ここで用例省略の原因は、出版社側の要求によることがほぼ間違いなく推察されるわけである。たしかに出版社としてみれば、辞書は莫大な資金をつぎこんで長期間をかけなくてはできないから、いきおい事業としてペイしようとするれば、少しでも売れ行きの伸びるようにせざるをえない。まさしく“出版者と編集家をもっともたやすい調和をもって協同しうるのは、生産原価を経済的にし、資本の廻転や回収を迅速・確実に行いうる方途に就く場合である。そこに、公刊される辞書の版型も分量も、そして内容も必然の規制を免れなくなる宿命が待っている”<sup>31)</sup>といわれるゆえんである。あとの方の「広辞林」「言泉」にみられる用例の省略は、諺語についてのものであって出典は漢籍になっている。

第2の、出典も全然示さない辞書がみられるのはなぜかという点になると、「言海」は“本書編纂ノ大意(イ)”で、“出典ニ至リテハ、浄書ノ際、姑ク除ケリ、簡冊の表トナラムヲ恐レテナリ”<sup>32)</sup>と明らかにしている。「言海」におけるこの態度は、現代向きの辞書においてはますます促進されるばかりであって、型がハンディで値段が安くて手頃で、それでいて内容的によくまとまっており、それぞれに特色をもっている昨今の国語辞書は、内容的にモダンであろうとすれば、これまでのような出典を掲げるために要する費用、時間、スペースもさかないですまそうとするし、その必要性があまり強く要求されないことも事実であると思われる。「明解国語辞典」「例解国語辞典」「岩波国語辞典」では意味が簡潔になっていることと、日常の使用例、いわばことばのありのままの姿を示すようにいろいろ工夫されている点で共通性がうかがわれ、それはそれなりに意義があるわけで、注目していいことである。こうしてみえてきて気がつくことは、国語大辞書の編纂には方法論を通してはじめに確かめたように、用例をあつめることから始めるべきであったのに、主な国語辞書によって調べた実態からは、方法論とはむしろ逆の結果がみられたことである。すなわち、用

例が少なすぎることに、現代の国語辞書は“現在の時点での普通の用字・用語の規範や知識を示す”<sup>33)</sup>傾向にあるということである。ごく限られた辞書について“愛”および“愛する”の二語にあたってみただけで(一冊の辞書についても該当するが)国語辞書全体をおしはかるのは無謀もはなはだしい。しかし、ここに挙げた二語に関して見出されたことは、一つの事実として否定するわけにはいかないのであって、その範囲で断定を下すならば、正しくは、＜代表的な国語辞書における“愛”および“愛する”の二語についての扱いは、用例に乏しく、その結果語史は未熟かあるいはまったくなきに等しく、ゆえに国語辞書の内容としてはきわめて貧弱である＞ということになる。用例を集めることは容易でなく、したがって国語大辞書の編纂は困難になるにしても、そのことによって学術的な論拠が軽視され見誤まられてはならないのである。要はいかにしてこの理論と実践を結びつけるかという最初の論題にもどり、用例を集めることを通して国語大辞書の可能性を問うことに焦点が絞られることになる。用例の欠如は、往々にして語史の欠如、語釈の不完全に波及するので、用例が3例ずつ挙っている「大日本国語辞典」「言泉」「広辞苑」「新潮国語辞典」にしても、それは語釈にとって決して十分ではなく、それらの全てをまとめてみた“愛”(イーニ)、“愛する”(イーチ)にしても、これでもって果して語史といえるものかどうか疑問である。<sup>34)35)</sup>ただどうにか語史らしいスタイルに近づいたとはいえよう。そうしたことからしても、まだまだ用例を集めることがはなはだ弱体であって、この点こそは国語辞書全般にわたってあてはまるようである。

## II. 国語大辞書実現の可能性

用例・出典の欠如は辞書にとって致命的といってもいい欠陥であることを知ると同時に、従来の国語辞書はこの点においてはなはだ不備であることが明らかとなった。現状ではこうした傾向が早急に改められるとも思われないが、しかし、辞書の編纂はまず用例を集めることから始めるべきであることは、すでに諸氏によって指摘されている。<sup>36) 37) 38) 39)</sup>この用例を集めるために欠かせないのが各種の作品毎の用語索引であるが、国文学における用語索引は総体的に数が少なく、その上索引のしかたが正宗敦夫編「万葉集総索引」とはまさに逆で、用例をともなっていないで出典だけを示している点に特色がみられるのである。最近はまだ新たに「後撰和歌集総

索引」(大阪女子大学国文学教室編 大阪女子大学 昭和40年)、「堤中納言物語総索引」(鎌田広夫編 白帝社 昭和41年)、「土左日記総索引」(日本大学文理学部国文学教室編 日本大学文理学部人文科学研究所 昭和42年)、「枕草子総索引」(榊原邦彦、武山隆昭、塚原清、藤掛和美編 右文書院 昭和42年)、「落窪物語総索引」(松尾聰、江口正弘編 明治書院 昭和42年)などの索引がみられるし、「古事記」や「日本書紀」など漢字で書かれている作品の用語索引も次々と出されてきている。こうした用語索引のありかたに対して、出典とともにぜひ用例もとるべきことは、以前別の立場から論じたところである。<sup>40)</sup> たとえば、先の“愛”(イ)の栄花物語からとった用例のような指示のしかたでは不完全なのであって、作品における用例の位置や他にどんな使用例があるかを調べようにも、用語索引が作成されていなければ直接本文にあたってみるほかなく、さらには用語索引があったとしても用例をともなっていない場合には、その索引のほかに本文もともに手許においておかなければ万全の備えにならない。探したい用語がその作品の中で1度だけ用いられているのであれば、あまり問題はないかもしれない。しかし2度、3度と用いられている場合には、用例がないとその都度本文にあたって確かめることが必要になる。それでも“栄花”の出典をつきとめる例などは、探したい語の前後をも用語索引にあたっていけば、本文がなくてもすまされるかもしれない。ところが、

将来の辞書は確かに分業的に広く、深く、大規模な組織で編纂されなければならないが、そこに至るまでの段階として、文献語に対しては、各種文献別に、綿密な索引が作られることが望ましい。すなわち、松井簡治が「大日本国語辞典」を編むにあたって用いた方法を、より広い対象に向けてより厳密に用いていくことが最も着実な方法として考えられるので、現在各種の文学作品に対して着々と索引作製が行なわれ、刊行されつつあることはまことに喜ぶべき現象であるといえる。<sup>41)</sup>

ここにおいて辞書編纂のための用例を集めるのに用語索引を指摘されたのはよいとしても、現在みられるような用例のない用語索引で果していいのであろうか。究極のところないよりはあった方がいいにはちがいないが、用例を集めることによって作られる辞書にこの用語索引を結びつけて考えるとき、なおさら無視するわけにいか

なくなることは、どうして最初から用例をともなった用語索引を完備しようとしないのであろうかということである。松井簡治氏は辞書の編纂に先立って自ら索引を用意したがその書目紹介のまえがきで“索引の蒐集及び編纂は辞典編纂の準備事業として必要なので、是がために数年を費した。一体索引がなくては辞典に採取すべき古来よりの語彙がどの位あるか、又其の典拠は何にあるかが分らない。それで先づ古人の作製したものを蒐集し、無いものは編輯所に於て編纂したのである”<sup>42)</sup>と述べているだけで、具体的に用語索引をどう作成したかはわからない。だが出来上ったところの「大日本国語辞典」を点検してみれば、決して用例のない用語索引で辞書を編まれたのではないといえるであろう。国文学の領域に見られるような用例のない用語索引がどうして出てくるかについては、一方では索引の対象となる作品が大きくはないから索引だけで用例はいらないという場合と、あまりにも作品が大きいのでとても用例までは出せないということで、大方は用例があれば便利でよいことは承知の上のことと思われる。いずれにしても、このどちらの意見も紙面をなるべくとらないという点で一致しているのであって、ここにまた出版上の制約がうかがわれるのである。国文学の用語索引に用例までとるようにするには、コンピュータの利用による作成に期待がよせられる。それによって大々的に旧套を打破して国語大辞書にも結びつく用語索引、実はそれが用語索引の当り前の姿なのであるが、を数と質の両面から用意していくようにしたいものである。また「時代別国語大辞典 上代編」(上代語辞典編修委員会編 三省堂 昭和42年)こそは、理想的な国語大辞書の編纂を側面から支える内容を擁して、引き続いて各時代別の今後の刊行が待たれる。

用例を集めることに次いで、実際には編纂方針、経費、人員、印刷など、問題は多岐にわたるざるをえなくなるが、こうして出来上る国語大辞書にどういう意義と価値があるかも一応考えておかなければならない。“序”において述べたように、国語大辞書が求められているのは事実であって、それというのも従来の国語辞書では語に対しての不安が残るからであると思われる。その不安は何かといえば集められている語が少ない、発音がわからない、語源が物足りない、語史がみられない、用例が不備である、語釈は正しいだろうかと等々に十分こたえられなかったことに帰せられようが、その背景には、言葉が発生する反面では消滅もし、時とともに移りかわっていくという性質があるからである。理想の国語大辞書と従



来の国語辞書とのちがいは、単に語において豊富になるだけでなく、その内容においても不安感の介入する余地がないように意をつくしたものであるという点に現われるべきである。そこではじめて辞書が言葉のかがみであることになり、半面には規範的な性格をおびることになって、厳密にいうなら国語辞書はそもそも百科的でなく、あくまでも語学的でなくてはならないはずである。そうした条件は大辞書であればあるほど強く要請されるわけで、そこにおいては語という語は全て網羅して、語の姿をありのままに記しておく、そういう配慮が必要なことになる。こうして国語大辞書の性格が明確に把握されてくれば、編纂方針も備えるべき内容も自ずから決ってくるはずで、国語大辞書の内容に伴う記述方式は、歴史的な記述によるのがもっとも好ましいことになりそうである。この歴史的とか記述的とはどういうことであるかという、その典型的な例は文法の記述形式にみられるのであって、今、英語学によってみれば次のように説明されている。記述文法 (Descriptive grammar) とは、

一定の時期（特に現代）に於て一言語の呈する現象をありのままに記述し、人々によって現実話されるあるひは書かれる状態を究明し、人々が自然に従ふ所の規則習慣を理解しようとする研究である。

といい、<sup>43)</sup> 歴史文法 (Historical grammar) については“言語事実の歴史的取扱ひで、それが今日あるやうな状態に達した発達過程を過去の記録を迎って明かにするもの”<sup>44)</sup> とある。ゆえに歴史的記述とは、国語においてもある時代のある語のありのままの姿を歴史的に掲載し、それをたどることによって今日までの過程が明らかになることであるということが出来る。ここに求められていることは、すなわち語史そのものであることがわかるのである。言葉を把握する上でこのような歴史的と記述的な手法がなされるのは、言語研究における通時的 (Diachronique) と共時的 (Synchronique) の概念に対応して行なわれるからである。文法にはまた規範文法 (Prescriptive grammar) というのもあって、この方は実用を主として正しく話したり書いたりする規則を教えるもので、いわば学校文法などに代表されることになるが、これはすでに客観的な事実の把握にもとづいていないことになる。辞書の規範性とはこうした規則を示すことでなく、言葉を誤りなく使う上でその典拠として求められるという意味での規範であるべきはずなのである。

言葉はどこまでも客体であって、使う側の節度によることを忘れてはならない。

話し言葉一つをとっても明瞭なように、言葉自体ははやりすたりがいちぢるしく速いので、後世になればなるほど用例を集めることが困難になり、そうした語彙の不備を補うために用語索引が多く作られるように望まれ、それにもとづいて辞書は多くの用例をとり入れていかなければならないはずなのに、用語索引も辞書ともに低調だとすると、

もし将来に歴史的な日本語辞典が考えらるべきだとするならばなおさらのことであるが、技術的な問題の精密な計測さえあやまらなければ、語彙論・意味論の進展とともに先ず記述的な辞書編集が始められてしかるべきものと思われる。<sup>45)</sup>

ことになるのであるが、“そこに意志が欠けている。協同が存在しない”<sup>46)</sup> から“自らの手で作ろうという気概、それだけが今日は、もっとも必要なのかも知れぬ”<sup>47)</sup> という現実に向かい向おうとすると、一方では深刻な問題を意識しつつも、過去におけるいくつかの試みとその経過を省みないわけにはいなくなってくるのである。そこで改めて注目したいのは、たとえ明治のはじめとはいえ官撰の辞書が編纂されたことがあるということ、そしてそれは残念なことに中絶の止むなきにいたったことである。その編纂はまさしく国家的事業の一環として行なわれたもので、編纂者のメンバーは木村正辞、横山由清、岡本保孝、小中村清矩、榊原芳野、黒河真頼、間宮永好、塙忠韶の8人で、のち小中村と間宮が退いて伊藤清民、田中芳男が加わったのである。その出版の経過を以下に記すと、

卷 一	阿部 (一)	(あ 一あこ)	明治 4 年
卷 二	阿部 (二)	(あさ一あと)	明治 4 年
卷 三	阿部 (三)	(あな一あほ)	明治 4 年
卷 四	阿部 (四)	(あま一あよ)	明治 4 年
卷 五	阿部 (五)	(あら一あを)	明治 4 年
卷 六	伊部 (一)	(い 一いそ)	明治 14 年
卷 七	伊部 (二)	(いた一いち)	明治 14 年
卷 八	伊部 (三)	(いつ一いと)	明治 14 年
卷 九	伊部 (四)	(いな一いほ)	明治 14 年
卷 十	伊部 (五)	(いま一いを)	明治 14 年
卷十一	宇部 (一)	(う 一うと)	明治 14 年
卷十二	宇部 (二)	(うな一うお)	明治 14 年
卷十三	衣部		明治 17 年

であって、卷一より卷五まで文部省編輯寮、卷六より卷十三までは文部省編輯局の編輯及び発行となっている。卷十三における掲載項目が不詳なのは、欠本のために調べられなかったためである。その記載は菊池大麓男爵旧蔵書にもとづく東京大学史料編纂所の「語彙」所蔵カードによった。なお、衣部の明治17年発行については“日本書紀が天武天皇即位後、内外多事の際人心の統一を図り、国威を大陸に示すべく撰定されたとほぼ同様の心組みをもって編纂された本書は、ある意味ではその要望に応えたとも言えるが、エ部までで中止し、組織自体が瓦解したことからすれば、\* 大局においては失敗したものと目される”<sup>48)</sup>の\* 印の個所の注記に“なお、現今見られる本はウ部までの十二冊本が多い”<sup>49)</sup>とある別の記事などもみられて、間違いはないものと思われる。この中絶にいたった原因については、① 編纂者多数で、議論にのみ日を過ごした為<sup>50)</sup> ② 編集委員に当時の大家を集めたのはよいが、議論にあげられるばかりで肝心の編集が進まなかったからであるといわれ、後のよいいましめとなった<sup>51)</sup> ③ ごく一部分だが原稿も出来たに拘らず、船頭多きが故か、遂に事業が顛覆沈没した例があった<sup>52)</sup> ④ 組織自体が瓦解したことからすれば、大局においては失敗したと目される<sup>53)</sup>などといわれていて、そのことに関連しては“真の意味の辞書の編纂は容易の業ではない。これには、もとより、多数の協力者が必要ではあるが、中心は、少数の方がよいことは、「語彙」編纂の事実が教えるところである”<sup>54)</sup> “この先例は、独裁的権限をだれかに与えない合議制は失敗することを教えている”<sup>55)</sup> “為政者・当局者は失費の大きい割合に「体例」が近代的でなく、内容が充実しないことをもって責めたらしい”<sup>56)</sup>などの論評や“その失敗はかえって個人の編纂に係る諸辞書の刊行を促す逆縁となった”<sup>57)</sup>という後世への影響の考察もみられる。確かに辞書にしる索引にしるその発展を支え、要となってきた点は、個人的な力に負うこと大であったといえよう。用語索引の正宗敦夫、国語辞書の大槻文彦、松井簡治、新村出、漢和辞書の柴田猛猪、諸橋轍次、英和辞書及び和英辞書の斎藤秀三郎の諸氏の果した功績は図り知れないものがある。しかるに過去はそうであったとしても、現在問われている国語大辞書は、これまで明らかにしてきたようにとうてい個人の力量では及びもつかない規模で質と量をともに備えることが要請されているのである。ことに国語大辞書の如きは国家的事業であるとの見解が出されていて、<sup>58)</sup> <sup>59)</sup> <sup>60)</sup> <sup>61)</sup> 細かくは、① 一人でなしに編纂する<sup>62)</sup> ② 集会を設けて編纂す

る<sup>63)</sup> ③ 文部省で編纂する<sup>64)</sup> <sup>65)</sup> ④ 宮内省で編纂する<sup>66)</sup> ⑤ 帝国大学で編纂する<sup>67)</sup> ⑥ 国語調査会で編纂する<sup>68)</sup> ⑦ 国立国語研究所で編纂する<sup>69)</sup> など、ほぼ同じ方向を向いて大体出そろっているのである。

ここから、一層協力して編纂に当たることがこれからの眼目となって、中でも肝心なのは分業の組織化と編纂のリーダーシップということになる。実現を図ろうとする場合、当然前途に横たわる障碍をのぞいていかなければならないが、その大きな障碍として経済的な基盤のないことが指摘されている。<sup>70)</sup> そこで実現を可能ならしめる解決策の一つは、国語大辞書の編纂を国家的事業の一環としてとり上げることである。もう一つの策は、国語辞書や用語索引で出版上の制約を言及したが、出版社による編纂の可能性を問うことである。出版社は確かに収益を度外視しては編纂にふみきれないであろうが、それにしても最近のように「国書総目録」や「時代別国語大辞典」などの大事業を一出版社が独自に刊行していることに、わずかながら可能性が期待されるわけである。いずれにしても完成までに長くかかることと、学問的態度で貫くことを考慮に入れておかなければならないことになる。

## 結

最初の問いは国語大辞書の実現を可能にするにはどうしたらよいかということであった。そのうちの大きな要因として、協同研究的な体制の確立と経済的な地盤の必要性が求められた。至難であるとはいえ、さらに打開策を検討せざるをえない。

そもそも一国に善き辞書なきことは、外にありては一国に学者なきこと、即ち一国人民の智識の欠乏することを示すものにして、内にありては、学徒修学上一大障碍をいたし、従ひて学問発達の妨害をなすものなれば、苟も国の名誉を思ひ、国の利益を計るものは、深く茲に鑑みざるべからざるなり。それ然り、右の如く利益なり名誉なりに関する所大なれば、害毒なり恥辱なりに関する所亦従ひて大なり（A一序）

この意識がすでに80年も前にあったという事実に対応して、未解決のまま今日まで放置されてきているところに一つの限界がみられる。理論と実践との乖離に対しては、往々にしてそのゆきつくところ学問としてではな

しに政策でもって処理されるおそれがあるが、国語大辞書こそは「時代別国語大辞典」全巻の完成を想像してもわかるように、わが国の文化財に匹敵するといっても過言ではなく、だからこそ国語大辞書の編纂は国語問題とは一応切り離して、純然たる学術事業としてのみ実現されなければならない。本論文も一貫してその立場を堅持してきたつもりである。要するに、国語大辞書を望む決定的な理由は、いうなればそうしたものが現実にないからであって、実際にその必要性を痛感しているからにほかならない。

時代が変わるにつれて社会も生活も変わっていく。国語も変わりつつある。辞書はそうした国語の変貌を語の面から忠実に記録していくことによって万人の利用に供され、はじめて辞書としての生命と価値をもつことになる。このことからしても辞書が辞書たりうるためには、すべからず学術的真理にもとづかなくてはならないことがいかに大事であるかわかるのであって、国語大辞書の編纂もその例外ではありえないのである。

かくして、国語辞書方法論を通して求められた国語大辞書の可能性は、ともかくもう一度方法論へ帰って、改めて実行することによってこそなりたつことがわかった。また国語大辞書の編纂は、国語問題の論争にとらわれてはならない。そこにもみ実現への足がかりがみられるからである。

(東京大学計数工学科図書室)

- 1) 福田恆存. 福田恆存評論集, 第5巻. 新潮社, 1966. p. 118.
- 2) 山本健吉. “字引について,” *学鐙*, 63巻, 7号, 1966. 7, p. 44.
- 3) *Ibid.*, p. 45.
- 4) 白井健三郎. “辞書の有難さ,” *学鐙*, 62巻, 8号, 1965. 8, p. 63.
- 5) 見坊豪紀. “現代語辞書の批判と編集の実際” <金田一博士古稀記念論文集刊行会, 編. 金田一博士古稀記念言語民族論叢. 三省堂, 1953> p. 37-43.
- 6) *Ibid.*, p. 43.
- 7) *Ibid.*, p. 30.
- 8) 上田万年. 国語のため(改正版). 富山房, 1897. p. 299-331.
- 9) 藤岡勝二. “辞書編纂法并に日本辞書の沿革” *帝国文学*, 2巻, 1号, 1896. 1, p. 15-32. 2巻, 2号, 1896. 2, p. 25-34. 2巻, 6号, 1896. 6, p. 26-44. 2巻, 10号, 1896. 10, p. 14-23.
- 10) (信濃教育会東筑摩部会内) 国語学講習会, 編. 国語学講習録. 岡書店, 1934. p. 95-120.
- 11) 竹村銀. “辞書編纂業の進歩及び吾が国現時の辞書,” *帝国文学*, 4巻, 10号, 1898. 10, p. 1110-1130.
- 12) 高楠順次郎. “日本字書の完成,” *言語学雑誌*, 1巻, 1号, 1900. 2, p. 1-16. 1巻, 2号, 1900. 3, p. 1-18. 1巻, 3号, 1900. 4, p. 1-7. 1巻, 4号, 1900. 5, p. 1-7. 1巻, 5号, 1900. 6, p. 1-10.
- 13) “辞書の出版,” *帝国文学*, 2巻, 11号, 1896. 11, p. 1341.
- 14) “日本辞書の編纂,” *言語学雑誌*, 1巻, 3号, 1900. 4, p. 92-5.
- 15) 見坊, *op. cit.*, p. 27-50.
- 16) 山田忠雄. “漢和辞典の成立,” *国語学*, 39集, 1959. 3, p. 8-30.
- 17) 中村広徳. “国語大辞典編纂の方法に関する一試案,” *国語学*, 39集, 1959. 3, p. 31-45.
- 18) 見坊豪紀. “辞書の姿,” *言語生活*, 114号, 1961. 3, p. 16-25.
- 19) 山田俊雄. “日本の辞書の沿革と将来,” *みすず*, 32号, 1961. 11, p. 2-16.
- 20) 全国大学国語国文学会. 研究史大成編纂委員会, 編. 国語国文学研究史大成, 15(国語学). 三省堂, 1961. p. 226-39.
- 21) 山田俊雄. “現代国語辞書の閉塞について,” *文学*, 30巻, 2号, 1962. 2, p. 1-11.
- 22) 山田忠雄. 三代の辞書——国語辞書百年小史——三省堂, 1967, p. 10-78.
- 23) 土橋八千太. “大言海訂正補録,” *日本学士院紀要*, 18巻, 2号, 1960. 6, p. 57-96.
- 24) 土橋八千太. “大言海補考余録,” *日本学士院紀要*, 21巻, 2.3号補遺, 1963. 11, p. 1-46.
- 25) 藤岡博士功績記念会, 編. 藤岡博士功績記念言語学論文集. 岩波書店, 1935. p. 584-9.
- 26) 大槻文彦. 言海. 林平書店, 1938. (本書編纂ノ大意 p. 1-2.)
- 27) 山田俊雄, 桑島裕編. 新潮国語辞典——現代語・古語——新潮社, 1965. (凡例 p. 6-7.)
- 28) *Loc. cit.*
- 29) *Ibid.*, (あとがき p. [1])
- 30) *Ibid.*, (あとがき p. [1-2])
- 31) 山田俊雄. “現代国語辞書の閉塞について,” *文学*, 30巻, 2号, 1962. 2, p. 2.
- 32) 大槻文彦. 言海. 林平書店, 1938. (本書編纂ノ大意 p. 7.)
- 33) 山田俊雄. *loc. cit.*
- 34) 新村出. 日本の言葉. 創元社, 1940. p. 169-74.
- 35) 大野晋. 日本語の年輪. 有紀書房, 1961. p. 91-128.
- 36) 中村広徳, *op. cit.*, p. 31.
- 37) 見坊豪紀. “辞書の姿,” *op. cit.*, p. 22.
- 38) 全国大学国語国文学会. 研究史大成編纂委員会, *op. cit.*, p. 238-9.
- 39) 山田忠雄. “漢和辞典の成立,” *op. cit.*, p. 28.
- 40) 金子豊. “国文学における用語索引のありかた,”

国 語 辞 書 方 法 論

- Library science*, no. 4, 1966. 7, p. 181-200.
- 41) 全国大学国語国文学会. 研究史大成編纂委員会, *loc. cit.*
  - 42) 松井簡治. “大日本国語辞典編纂に用ひたる索引の一部,” *国漢*, 31 号, 1937. 1, p. 9.
  - 43) 市河三喜, 編. 英語学辞典. 研究社, 1940. p. 433.
  - 44) *Loc. cit.*
  - 45) 山田俊雄. “現代国語辞書の閉塞について,” *op. cit.*, p. 6.
  - 46) *Loc. cit.*
  - 47) 山田俊雄. “日本の辞書の沿革と将来,” *op. cit.*, p. 16.
  - 48) 山田忠雄. 三代の辞書, *op. cit.*, p. 56.
  - 49) *Ibid.*, p. 57.
  - 50) 藤村作, 編. 日本文学大辞典, 別巻. 新潮社, 1952. p. 88.
  - 51) 見坊豪紀. “辞書の姿,” *op. cit.*, p. 17.
  - 52) 山田俊雄. “日本の辞書の沿革と将来,” *op. cit.*, p. 12.
  - 53) 山田忠雄. 三代の辞書, *op. cit.*, p. 56.
  - 54) 国語学会, 編. 国語学辞典. 東京堂, 1965. p. 487.
  - 55) 見坊豪紀. “辞書の姿,” *op. cit.*, p. 25.
  - 56) 山田忠雄. 三代の辞書, *op. cit.*, p. 57.
  - 57) *Loc. cit.*
  - 58) 高楠順次郎. “日本字書の完成,” *言語学雑誌*, 1 卷, 2 号, 1900. 3, p. 2.
  - 59) “日本辞書の編纂,” *op. cit.*, p. 94.
  - 60) 上田万年, 松井簡治. 大日本国語辞典. 富山房, 1952. p. 序文 9 (芳賀矢一 序)
  - 61) 下中弥三郎. “大辞典完成に際して,” <平凡社, 篇. 大辞典, 25・26. 平凡社, 1954> p. 6.
  - 62) “辞書の出版,” *op. cit.*, p. 1341.
  - 63) 藤岡勝二. “辞書編纂法并に日本辞書の沿革,” *帝国文学*, 2 卷, 10 号, 1896. 10, p. 23.
  - 64) 竹村鍛, *op. cit.*, p. 1130.
  - 65) “日本辞書の編纂,” *loc. cit.*
  - 66) 竹村鍛, *loc. cit.*
  - 67) “日本辞書の編纂,” *loc. cit.*
  - 68) 高楠順次郎, *loc. cit.*
  - 69) “理想の国語辞書を持とう,” *言語生活*, 114 号, 1961. 3, p. 13.
  - 70) “暮しの中の辞書,” *言語生活*, 156 号, 1954. 9, p. 12.